

## 製作年とモデルの特定

たじまなつこ  
田島奈都子

(青梅市立美術館 学芸員)

創刊以来、国内外の俳優の個性的な肖像や、各映画の名場面の写真がふんだんに掲載された『キネマ旬報』は、それゆえにポスター用原画を描く戦前期の日本人図案家からは、「ネタの宝庫」とされた。一方、現代に生きるポスター研究者からすると、そのような両者の関係性は、ポスターの製作年やモデルを特定する材料となり得るだけに、同誌は非常に有益な存在となっている。

さて、今回紹介する《塩水港製糖株式会社》(図1)は、職場近くのJR青梅駅構内に掲げられているポスターであり、製作を請け負った印刷会社の名称等から、1927～35年までの作品であることは判明していた。しかし、それ以上の情報は長らくつかめず、1930年6月11日発行の同誌第368号に掲載された、同年公開の「キング・オブ・ジャズ」に出演したダンサー《Gシスターの肖像写真》(図2)を見つけたときは、思わず「これか!」と、心の中で叫んだほどであった。

当時は音楽としてはジャズが、髪形としてはこのボブカットが、それぞれ尖端を行くものと見なされ、世界的に流行に敏感な人々の間で人気を博した。なかでも洋装と並んでこの髪形は、1920年代の日本に出現したモガ(=モダン・ガールの略)を、象徴するスタイルと目されたことから、モダン・ガールの「モダン」に対して「毛断」の漢字が当てられたりもした。もっとも、長らく「女の命」とされた髪を短く切る行為には、同性の間でも否定的な意見が根強く、加えて女優の場合は、髪を短くしてしまうと、役柄が限定される危険性があったことから、当時活躍した女優で実際に断髪した人物は、実はそれほど多くはなかった。しかし、日活の市川春代は本人の快活な性格も相まって、ボブカットが非常によく似合い、その容姿からアメリカのフラッパー女優になぞらえて、「和



図1：《塩水港製糖株式会社》



図2：《Gシスターの肖像写真》  
『キネマ旬報』第368号、1930年6月11日発行



図3：《カガシクリーム》  
『大阪朝日新聞』1931年9月8日付、朝刊7面

製コリーン・ムーア」と称されたこともあった。

ところで、《Gシスターの肖像写真》(図2)とボブカットの似合う市川の2つの存在は、その後思わぬ展開を見せることになった。《カガシクリーム》(図3)は、1931年9月8日の『大阪朝日新聞』朝刊7面に掲載された広告であるが、ここで市川春代はGシスターと全く同じポーズと表情をしており、この作品が《Gシスターの肖像写真》(図2)を翻案していることは明らかである。ただし、Gシスターは姉妹であるものの、市川は1人しかいないことから、反転させた写真を左右対称に2枚並べることによって、「Gシスター風」に仕上げられており、この発想はなかなかユニークである。

『キネマ旬報』に掲載された外国人俳優の肖像写真は、被写体がいずれも当代一の美男美女であるうえに、全般的に各人の個性を感じさせるものが多く、かつ彼らがカメラの前で見せるポーズや表情は、同時代の日本人俳優よりもバリエーションに富んでいた。一方、図案家を筆頭に、広告制作に関わる人々は、常に目を引く

新鮮な題材を探しており、多様な写真が掲載された『キネマ旬報』は、各人に大いに刺激を与えた。

こうして、1930年6月11日発行の同誌第368号に掲載された《Gシスターの肖像写真》(図2)は、翌年の《カガシクリーム》(図3)に翻案とされたが、そうなるに、冒頭で紹介した《塩水港製糖株式会社》(図1)は、前者から直接ではなく、後者の登場を受けて制作された可能性も考えられることになる。ましてや、後者のモデルが市川春代であり、《塩水港製糖株式会社》(図1)のモデルが似ているとなると、その可能性が高いようにも思えてくる。

ただし、いずれにしても《塩水港製糖株式会社》(図1)は、《Gシスターの肖像写真》(図2)の存在により、製作年が1930～34年の間に絞り込まれ、『キネマ旬報』に掲載された写真が、日本の商業デザイン全般に対して、広く影響を与えた事実を揺るぎは生じない。従って、そのような視点で同誌を概観してみるのも一興であり、実際、発見はまだ続く。